

3. 世界のなかの中国語と日本

日本の中国語教育はどこに向かうのか
古川裕（大阪大学）

文部科学省が今世紀初めに『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想』を発表して以来、小学校における英語活動の導入から大学における英語教育の必要性の有無に至るまで、ここ数年にわたって英語教育をめぐる議論は様々に喧しい。その主な流れをたどると以下のような教育政策が背景に認められる（参考資料：大津由紀雄編著『危機に立つ日本の英語教育』慶應義塾大学出版会、2009年7月）。

2002年7月 文部科学省『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想 - 英語力・国語力増進プラン』

2003年3月 文部科学省『英語が使える日本人』の育成のための行動計画』(2003~2007年版)

2008年3月 小・中学校学習指導要領告示（小学校は2011年、中学校は2012年より実施。一部は2009年度から前倒して実施。）：小学校で外国語活動を必修化、中学校外国語の週4時間化、語彙の3割増、「読み・書き・聞き・話す」4技能による総合的コミュニケーション能力の育成、伝統文化の尊重など。

2009年3月 高等学校学習指導要領告示（2013年施行）

このような主流が流れている一方で、英語以外の「その他の外国語」をめぐる議論は話題の中心からどんどん外れ、取り残され、大学におけるいわゆる第2外国語の教育もますます先細りの様相を示しているように感じられる。アジアの時代と言われる21世紀の現在、我々が真に考えるべきことは、英語という一言語に特定化しない『外国語が使える日本人』の育成のための戦略構想』への発想転換ではないだろうか。

今回はそのための話題の一つとして、日本における中国語教育を概観したい。日本の中国語教育と言えば、江戸時代の唐通事養成や、更には遣隋使・遣唐使という留学生派遣政策にまで歴史を遡れるが、まずは21世紀の現在、その伝統をいかに受け継ぎ、どのように変化しようとしているかを概観する。

ここで、特に注目したいのは次の2点である：一、日本の大学における中国語教育の現状と諸問題；二、孔子学院に代表される中国からの戦略的ソフトパワーが、日本の中国語教育に与える影響。

まず、日本の大学における中国語教育の現状は、先に述べたように第2外国語としての中国語の教育が先細りの様相を呈していることを指摘せねばならない。かつて前世紀末には、大学の外国語選択科目として中国語は英語に次ぐ多大な人気があり、全国4年制大学のおよそ8割以上で中国語が開講され、受講者数は年々増加する傾向にあった（参考資料：『日本の中国語教育—その現状と課題・2002』日本中国語学会中国語ソフトアカデミズム検討委員会編、好文出版2002年3月）。多くの教育現場では、開講クラスの急激な増加に伴う教室の手配や教員の依頼などに嬉しい悲鳴をあげたものである。しかし、文科省による大学教育における大綱化が施行されて外国語科目の開講が自由化されたことによって、

英語を除く外国語の授業開設数が激減しているという客観的な現状がある。これに加えて、日本人の対中感情の不安定さが中国そして中国語に対する親近感や興味を減少させ、若者たちの間に中国語を進んで学ぼうとする意欲がわかないという主観的な側面が存在することもやはり指摘せねばなるまい。勿論この2点は大学における中国語教育の弱力化を導いている主たる原因に過ぎず、その他にも様々な原因が錯綜していようことは言うまでもないが、まず、われわれ大学における中国語教育の関係者は危機意識を共有すべきであろう。

一方で、このような日本の大学における中国語教育の悲観的な現状とは裏腹に、21世紀に入ってから中国が国家的な戦略として推し進めている中国語の世界普及を目指す動きは益々強大化している。振りかえれば、2002年夏に北京の人民大会堂と北京飯店を会場として大々的に開催された“世界漢語大会”がこのソフトパワーを大きく進め始める契機であった。かつて“国家対外漢語教学領導小組弁公室”（国家対外中国語教育指導グループ）と称していた政府系組織が“国家漢語推广領導小組弁公室”（国家中国語推進普及指導グループ：略称“漢弁” <http://www.hanban.edu.cn/>）と名を換え、名実相揃って「中国語の世界各地への普及」に乗り出す姿勢を打ち出したのがまさにこの“世界漢語大会”であったのだ。現在、この“漢弁”は正式には“孔子学院総部”とも称しているように、世界の各地に“孔子学院”を創立している。その数は、当初の設立目標であった100校を遥かに越えて、すでに250校にも上る孔子学院が世界中で開設運営されているという。わが国では、2005年に立命館大学と北京大学との連携によって京都に開設された立命館孔子学院を嚆矢として、既に十数校の孔子学院、孔子学堂（“孔子課堂”）が設立されている。

【日本の孔子学院（パートナー校）】

立命館孔子学院（北京大学）、桜美林大学孔子学院（同済大学）、北陸大学孔子学院（北京語言大学）、愛知大学孔子学院（南開大学）、立命館アジア太平洋大学（浙江大學）、札幌大学孔子学院（広東外語外貿大学）、大阪産業大学（上海外国語大学）、岡山商科大学（大連外国語学院）、早稲田大学（北京大学）、工学院大学（北京航空航天大学）、福山大学（対外經濟貿易大学、上海師範大学）、神戸東洋医療学院孔子課堂（天津中医薬大学）

欧米やアフリカなど中国理解や中国語学習の条件が必ずしも十分でなかった諸外国と違って、もともと中国語教育の歴史と環境が比較的整っていた日本という場において“孔子学院”という外来の新組織が続々と設立されている状況はかなり特殊であると言わざるを得ない。既存の中国語教育機関がソフトパワーの進出に対して警戒心を抱くであろうことは想像しやすいが、いたずらに排外的になるのも好ましい態度ではないだろう。日本の中国理解を深め、中国語教育のレベルアップに貢献できるよう、大学や高校・語学学校など既存の教育機関と新来の孔子学院がそれぞれの特徴を生かしながらどのように共存できるかを探るのが我々が直面している新たな課題である。